

1. 調査目的等

小・義務教育学校1年生から6年生の児童の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証を行うことを通して、学力向上に関する取組の改善に役立てる。

2. 学校ごとの指標

標準化得点(全学年):国語50以上 算数50以上

3. 指標にむけての取組

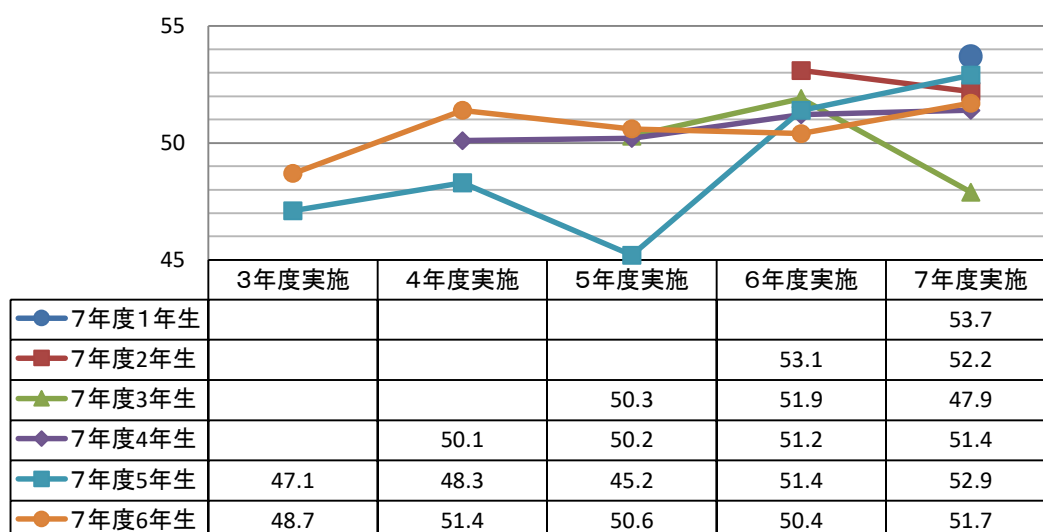
- 1単位時間の学習指導の工夫として、「学びたくなる導入」「学びを選択する展開」を意識した授業を実施し、主体的・対話的に学ぶ児童の育成を旨として授業改善に取り組む。
- 自力解決の段階を中心に、「なぜ」「どうして」「どのように」などの発問を行い、理由や根拠とともに自分の考えを書いて交流する場面を設定した。高学年では、ICTを利用した交流場面を設定した。
- 国語や算数の終末場面(毎時間)で、「分かったこと」「できるようになったこと」「わからなかったこと」などを振り返り、学びの変容を自分でノートなどに書く活動を位置づける。
- 各教科の単元末にデジタル教材を活用し、個別の弱点に特化した問題の反復練習を実施する。
- 朝学習において、読解力問題の実施と解説、算数の基礎基本の定着を図る。

4. 調査結果

※学校平均(国語・算数)5年間の推移 (標準スコア:全国値の正答率を50とした時の換算値)

年度	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度
本校(A)	47.0	47.8	48.8	51.0	51.6
嘉麻市(B)	47.0	47.2	48.5	49.8	50.4
(A)-(B)	0.0	0.6	0.3	1.2	1.2
全国値との差 (A)-(50)	-3.0	-2.2	-1.2	1.0	1.6

各学年の標準スコアの推移



5. 各学校における分析

4学年で、2教科とも成果指標を達成することができ、6年生の算数は成果指標達成まで、あとわずかであった。その要因として、主題研究で取り組んできた授業の導入段階で学ぶ意欲を高めるための工夫や展開段階で学びを選択できるようにしたことで学習意欲が高まったり、自分と異なる考えを交流することで多様な考えに気づくことができたと考えられる。また、授業における自力解決の段階で、理由や根拠とともに自分の考えを書いたり交流したりする活動の設定や、終末段階において「分かったこと」や「できるようになったこと」等を書く活動を継続してきたことで、自分の考えを表現することに自信を持つことができるようになったことや論理的に思考する力が高まったことが要因であると考えられる。

また、家庭学習の課題に読解力問題を取り入れるだけでなく、朝学習の時間に、読解力問題に取り組み、解説と振り返りの時間を取り入れてきたことで、基礎基本の定着と書くことの習慣化が図られたと考えている。

さらに、単元終末での習熟度別学習、単元テストの達成率80%以下の児童への個別指導、単元を通してデジタル教材「タブドリ」を活用し、個別のつまづきに応じた問題の反復練習が効果的であったと考える。

6. 各学校における今後の取組

○「書く活動」と交流活動の充実

理由や根拠とともに自分の考えを書く活動を行い、ICT等を用いた他者との交流を通して、よりよい考えをつくることができるようにする。

○短いスパンで、一人一人の弱点を克服させる取り組み

毎時間の授業での一人一人の定着を把握し、単元テストまでに、個別の支援を実施する。また、単元終末での習熟度別学習、単元テストの達成率80%未満の児童に対する個別指導の徹底を図る。

○「課題解決に向けて、主体的・対話的に取り組む児童生徒の育成」の研究と実践を進める

本年度の校内研究をもとに、嘉麻市教育委員会委嘱研究発表会に向けて、研究と実践を積み重ねる。

7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

◎組織的に学力向上を図ることができるように、特に次の3点について指導助言及び支援を行い、周知徹底を図る。

◆校内における学力向上検証委員会において単元テスト(全単元の80%において目標得点を達成できた児童が学級の80%以上になることを目指す)や各学力向上の取組について成果指標をもとに結果を検証し、授業づくりや学力向上の取組の更なる改善を図る。

◆「授業づくりの手順」や「学習指導過程の基本モデル」を教育委員会として示し、それらをもとにした授業改善を推奨する。そのために、校内研修等に指導主事を派遣し、具体的な指導助言や支援を行う。

◆小中一貫教育に基づき、組織的・計画的に内容を設定し、個に応じた課題の提示(AIDリルの活用等)を図ることにより、家庭学習の習慣化及び充実に図る。

※(10×学年+10)分以上の家庭学習の習慣化